

理事長所信

一般社団法人宮崎青年会議所

2026年度 理事長予定者 山崎 隆太郎

【はじめに】

青年会議所とは。

入会以来、自問自答し続けてきた壮大なテーマです。

私の8年というJC生活では短く、本質を理解するにはまだ早いのかもしれません。

しかし、最初はよく分からぬ。から始まり、1年ごとに自身に与えられた役割、職務を全うすることで、見えないものが見えるようになり、青年会議所の魅力を体感でき理解が深まってきました。今私はこの素晴らしい組織を正しく継承していくことに意義を感じています。

「JCしかない時代から、JCもある時代になった。」と言われることが増えましたが、私は間違えていると考えます。この団体には他団体との明確な違いがあります。

常に、自分ではない誰かを主語に活動していること。恒久的世界平和という果てしない理想を掲げ、細分化した地域に目をむけ地域課題を解決すること、その過程でリーダーシップを開発するという2つの大きな目的は唯一無二であります。

例えば、経済団体である側面から、地域にボランティアとして貢献すればいいという誤解。

例えば、青年団体という特性上、大きすぎる夢を描き、課題対象の的を絞り切れずイベント要素の強い効果を生みづらい事業を実施。など。

本質を捉えようとせず、容易い事業、方法を選択する場面が増えたことにより組織のアイデンティティがぼやけてしまったのだと考えます。

「失敗してもいい団体」それは結果がでなくてもいい。という意味ではなく、必ず、わずかでも課題が解決されるべく結果をださなければなりません。その手法やプロセスの失敗は次につながるという意味であると解釈しています。そこまで真剣に取り組むからこそリーダーシップは開発されるのです。

これは近年、全国のLOMで散見されるJCの変化ですが、そんな今だからこそ真価を示さなければこの組織に価値はなくなります。

中にはそんなに、JCを頑張れる人は一部の人間だと笑われるかもしれません。しかし、そんなに頑張れる人なんて端からいません。自身への負荷強度を少しづつ高めた結果でしかなく、その過程でJCの理念やベクトルが理解でき、誰かのためだからこそ“やりきる”原動力を得られ、推進した結果自分の成長を実感できる。だからこそ、また挑戦したくなるものであると体験をもって痛感しています。

この、なんとなくの理解が確信に変わったこの経験を言語化して共有できる人間を増やし、持続性のある組織であるために、時代が変わっても継承しなければいけない青年会議所の使命を重く受け止めています。

【出向の機会】

私は 2019 年に入会をいたしました。全国大会宮崎大会を主管した翌年であり、先輩方は全国大会のために莫大な時間と労力を注がれてこられたことが雰囲気からも伝わってくるほどでした。全国大会を知らない私としては、その経験に最大限の敬意を払いながらも、何処か、同じチームではない、よそ者感を感じたことを記憶しております。幸いにも先輩方から全国大会までのお話をたくさん聞かせていただいたことで、自分なりに全国大会を主管するということがどんなものなのかを考えるようになりましたが、体験していない私以下の世代はどこまでいっても聞いた話に過ぎず、身近にいる先輩方との経験の差が埋まらない悔しさもあり、積極的に出向に挑戦しようと思えるようになりました。

ブロック、地区、日本と出向をさせていただく中で、当初は新しい出会いが楽しくてのめり込み、気づいたころには少しずつ職責の大きさに立ち向かうことに真剣になり、最後には掲げる成果目標の大きさに潰されそうになりながらも、仲間と理想を達成させる喜びを分かち合うとても尊い経験をしました。そのすべての経験が自身の尺度を大きく広げてくれたと感じています。今となっては、全国大会を主管する意義やご苦労を理解できるようになりました。あらためて関わられた全ての先輩方に尊敬の念が増すばかりで、そこで得た経験はしっかりと継承していかなければならぬと襟を正す思いであります。

振り返れば、出向を薦めていた先輩方には当初からレールを敷いていたいたのだと深く感謝しております。宮崎青年会議所は全国大会以前より、多くの出向者を輩出してきました。先輩方もひとつずつの出向の経験をもとに成長され、LOM に還元してこられた結果、今に至りますが、LOM 内のアカデミー会員の割合が 6 割近くに増えている今、LOM が築いてきた歴史、伝統を次世代に残していくために経験をつないでいく責務があります。LOM のメンバーに出向の経験を共有し、ひとりでも多くのメンバー成長の機会を提供し続けるべきであると考えます。

【宮崎青年会議所の未来を見据えて】

・出席率向上

2026 年度の卒業生数は直近 10 年間において 3 番目に多く 24 名おります。2021 年より続く、会員純増の流れを途絶さないためにも会員拡大は最重要項目となります。しかしながら、例年拡大数こそ成功傾向にありますが、近年アカデミー比率が上がったことにより、JC への理解が乏しいままに勧誘をする場面が見られ、新入会員の入会後事業参画への積極性が二分されている現状があります。まずは、会員全員が JC の本質、目的を理解して伝えられるよう拡大活動をパッケージ化してリクルーティングの質を平準化します。また、新入会員の仮入会後にはアカデミー比率が約 58% となる見込みであり、継続的にアカデミー事業と新入会員育成事業は急務であります。本質を考えると、自身の自己研鑽のためにも LOM での理事経験は最低限必須であるという意識を醸成し、後にキャリアアップを目指しやすくする枠組みとして、経験値を増幅させるアウトプット型の事業を展開してまいります。

一方で、直近 3 年において例会出席率は平均約 66% を推移しており、理事役員数を除いて考えると既存会員のスリープ化は顕著であります。2026 年度は委員会数を増やすことで、委員会定数を減らし委員会内のコミュニケーションをより濃密にすることで出席率を 10% 向上させます。多様性を考えるあまり薄れてしまっている出席に対する優先順位を向上させるためにも、委員会単位での連絡調整をデジタルツールに頼り過ぎない、深い人間関係の構築が必要であり、委員会の在り方を共有し運営面から見直します。

・人財育成

我々にはリーダーシップの開発という目的があります。事業を共に構築する市民の方は勿論ながら、一人ひとりが次なるステップアップを目標とする組織でなければなりません。昨今、理事やそれ以上の役職に就くことがネガティブな面のみ取り沙汰され、該当者の消極的姿勢は課題のひとつであります。先述のとおり、課題を解決するという確固たる使命を理解させ、事業構築を通して課題対象者からの適切な評価が得られることで、承認、評価され、矜持が得られるもの信じています。人財育成に重点を置く意味でも、役職者のそれぞれの職務を明示し、組織的に育成を実行してまいります。

【より良い宮崎を目指して】

2021 年度に次なる 5 年の方向性を示す NEXT5 を策定しました。SDGs を軸に、社会、経済、環境と、地域、人財、組織をテーマに 24 項目からなる、誰も取り残されない地域、労働生産性を向上させる地域、持続可能で安全な地域の実現を掲げ活動してきました。現在、検証中ですが、事業を実施するうえで対象者を広く設定している傾向にあり、事業内容の良し悪しに関わらず、副産物的にいくらかは地域に貢献できているものとして事業を終えているケースが多いため課題解決につながっていないことや、正しく検証されてないこと、そもそも認知されていない事業の方が多いような検証結果が得られました。出てきた課題点に向き合い、2026 年度に新たなる 5 年に向けた中期計画を策定いたします。

また、2025 年には宮崎市の総合計画も改定され 2034 年までの 10 年計画が発表されました。

2018-2024 年度を対象に策定された第 5 次総合計画との比較でも見て取れるように、開かれた都市を目指し、挑戦や成長を掲げています。子供をはじめ市民を取り残さないという意思がより明確化されました。少子高齢化をはじめ、地域が抱える課題は多岐にわたりますが、行政が捉える課題に沿い、青年らしく圧倒的な行動力を発揮し地域課題の解決に取り組む所存でございます。我々の解決するべき課題は行政課題よりもさらに細分化された問題であり、全てを解決できる訳ではないと考えます。地域における多様な主体と人材が互いに影響しながら、地域課題の解決に資するイノベーションを創出することで、小さな成功体験を積み上げ、ロールモデルとなるべく事業を実施する必要があります。

- ・時代の変化を見据えて成長し、世界に開かれているまち
- ・多様性を認め、互いに支え合うみんなに開かれているまち
- ・明日への希望にあふれ、未来に開かれているまち

2026 年度は総合計画にあるこの 3 つの基本構想を軸に地域課題解決、青少年育成、国際課題に対して JC が取り組むべき課題抽出を適切に行い、運動を展開いたします。

【正しい価値を的確に広げる】

多くの LOM で広報の重要性から SNS の運用を開始して久しいですが、その多くは事業や例会の実施報告に近い形でアップロードされているように感じます。新入会員の拡大のきっかけや、適切なパートナーの発掘、フォロワーとの協力体制の構築の為には、我々の想いに共感していた大切なことこそが重要であり、事業・運動の計画段階から実施にむけて、課題を発掘し、問題を提起。理念や趣旨、想いを広報していく共感する人を増やす必要があると考えます。また、ブランディングは専門的スキルを持って発信しないと効果が薄れるという点も課題であり、専門知識を有するメンバーに監修していただき、ブランディング向上に寄与する広報の基礎を理解、作成することで実施報告型の広報から昇華させます。

【JC の山/周年記念事業】

1977 年、当時 LOM で行っていた奨学金事業の持続性の観点から、高値で取引されていた木材に着目され、加江田の市有地 2ha に 4000 本の樹木を植林されました。それから管理を目的とした草刈り作業を含め、青少年育成に寄与する事業においても活用されてきた JC の山は 2026 年度、50 年の節目をもって伐採、売却の計画を立てております。このような運動を起こそうとした精神性こそ継承すべきであり、資金を一過性のものに使うことは相応しくなく、定款第 53 条の規程に基づき、本来の目的であった奨学金と用途が近い形で、青少年育成に寄与する事業を創設すべきであると考えます。

【75 周年の節目】

1951 年 10 月 22 日。我々の純粋な正義感と、目的完遂の確固たる実行力とがこの茨の道の最尖端を進んでこそ始めて成果を期待出来ると自覚し、正しきを愛し、活動に富んだ純血青年が同志相寄り相互の啓発と社会への奉仕に努め、経済社会の現状を研究して、その将来進むべき方向を明確に把握し本市経済の強力な推進力たらん（趣意書原文）として 47 名のチャーターメンバーにより、全国で 26 番目の青年会議所として誕生しました。先輩諸兄姉はこの創始の想いを受け継ぎ、個人の修練、社会への奉仕、世界との友情、の三信条のもとリーダーシップの開発と、宮崎により良い変化をもたらすべく運動を展開されてきました。創立から 75 年たった今、この理事長所信をしたためながら創始の精神が受け継がれていることを実感しています。時代の変化にかかわらず、不变の精神を正しく承継する責務を果たしてまいります。

【結びに】

私には、7歳と5歳になる子供がおります。

子供たちにはJCに時間を取りられ父親が不在だと思われたくない、パパはヒーロー活動をしてい
ると言っています。無邪気な子供は、昨日はどんな敵と戦ったのかと興味津々に聞いてきますの
で話を合わせ、時には、わざわざ自宅の窓から遠くを眺め、何をしているの？という質問に対し
て困っている人がいないか探している。と芝居を打つこともあります。付き合ってくれているの
は子供の方かもしれません、子供たちはパパがヒーローだと喜んでくれています。

面白いもので、言い続けているうちに本当にそうだといいなと思うようになるものです。

私は今誰かを助け、役に立てるヒーローだと思って活動しています。

ものの例えですが、そのくらいの信念がなければ行動できません。

自己成長も、地域をより良くする運動の展開も。自分のためだけなら頑張れません。

誰かのために、地域のために。だからこそ今の自分を超えてください。

PLUS ULTRA

さらに向こうへ

【一般社団法人宮崎青年会議所 2026年度スローガン】

真価を示す PLUS ULTRA